

どちらも ^{201}Tl -SPECT では cold area を示しており、病理診断は astrocytoma grade I であった。

【結論】全ての症例において glioma の grade と ^{201}Tl の uptake の間に相関を示した。更に症例1, 2では radiation necrosis と recurrent glioma の鑑別に ^{201}Tl -SPECT が有用と思われた。

P-B-10) $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -DTPA-ヒト血清アルブミン (HSA-D) SPECT による脳腫瘍の血管床及び血管透過性の評価について

妹尾 誠・中川原 譲二
 福岡 誠二・片岡 丈人
 諫山 幸弘・安齊 公雄
 早瀬 一幸・吉田 英人
 末松 克美・中村 順一 (中村記念病院) 脳神経外科

【目的】天幕上の脳腫瘍25例〔転移性脳腫瘍10例, 悪性星細胞腫 (Gr. 3) 8例, 髄膜腫7例〕を対象として, $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -DTPA-ヒト血清アルブミン ($^{99\text{m}}\text{Tc}$ -HSA-D) 及び ^{201}Tl SPECT を施行し, 前者の臨床的意義について検討した。 $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -HSA-D SPECT ではトレーサー投与10分後に early 像, 5時間後に delayed 像を撮像し, 各々 HSA-index (腫瘍/皮質領域) を算出し, その経時変化及び Tl-index (腫瘍/対側大脳) との相関関係を分析した。【結果】各種腫瘍型において HSA-D delayed index は early index よりも有意 ($p < 0.05$) に増加した。悪性星細胞腫と髄膜腫で, HSA-D early 及び delayed index が有意 ($p < 0.01$, $p < 0.001$) に相関し, 悪性星細胞腫では delayed index と Tl-index が有意 ($p < 0.05$) に相関した。【考察】HSA-D early index は, 腫瘍の血管床, delayed index は血管透過性を反映し, これらと, 悪性度を反映するといわれる Tl-index の複合利用は, 臨床的に有用と考えられた。

P-B-11) C-11 methionine による脊髄髄内腫瘍の PET イメージ

笹嶋 寿郎・峯浦 一喜 (秋田大学脳神経) 外科
 伊藤 康信・古和田正悦
 畑澤 順・小川 敏英 (秋田県立脳血管) 研究センター
 上村 和夫 (放射線科)

脊髄病変の診断は MRI などの非侵襲的画像診断の進歩で飛躍的に向上している。最近, 頸髄髄内腫瘍において C-11 methionine (Met) PET を行い, 若干の知見を得たので報告する。

症例は68歳の男性で, 5年前より両足底から上行性に進行する知覚低下があり, 1年前には進歩が困難になった。入院時, C8 以下の知覚障害と軽度の四肢麻痺があり, 両下肢の腱反射が亢進していた。MRI で C3/4 および C6 から Th2 の椎体レベルに T_1 強調像で等信号, T_2 強調像で高信号の髄内病変が認められた。病変は Gd-DTPA で境界鮮明に均一に増強され, その頭および尾側に嚢胞を伴っていた。PET は画像再構成による正中矢状断で, Met 集積域が C6 から Th2 レベルに明瞭に描出され, ことに Th1~2 レベルの腹側に高集積域がみられた。手術所見では腫瘍が C6-Th2 の Met 集積域に存在し, Met の高集積域で周囲組織と強く癒着しており, 栄養血管が豊富であった。腫瘍摘出と嚢胞の開放を行い, 組織診断は ependymoma であった。

P-B-12) Symptomatic pineal cyst の1例

岡崎 秀子・田中 隆一 (新潟大学脳研究所) 脳神経外科
 青木 廣市・新井田広仁 (新潟県厚生連中央) 総合病院脳神経外科
 中沢 照夫

閉塞性水頭症により発症した1例を経験したので報告する。症例は57歳女性。頭重感を主訴に受診したが, 軽度の知能低下以外には, 特に神経学的に異常を認めなかった。画像上, 側脳室は著明に拡大し, quadrigeminal plate の上方に位置した cystic mass により中脳水道は閉塞されていた。CT cisternography では cyst 内への造影剤の移行は認められなかった。MRI では Gd により薄く平滑な wall が描出された。Transtentorial supracerebellar approach にて cyst を亜全摘し, 症状の改善をみた。Pineal cyst は画像診断の進歩に伴い MRI で2.5~4%に発見されるが本例のように症状を呈する例は稀である。

P-B-13) 滑車神経鞘腫の1例

長野 隆行 (盛岡赤十字病院) 脳神経外科
 佐々木一裕・川守田 厚 (同 神経内科)

症例は39才の女性。主訴は頭痛・嘔吐・複視。現病歴は来院2年前より左目がちらつき始め, 平成4年7月20日頃からはめまいが出現。7月26日朝, 左前頭部の頭重感・嘔吐・複視を訴え, 同日当院神経内科を受診。脳腫瘍の診断で8月22日当科紹介入院となる。神経学的陽性